フェンリルさん頑張る

けんしょ〜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
フェンリルさん頑張る

【Ｎコード】
Ｎ６７７２Ｚ

【作者名】
けんしょ～

【あらすじ】
村でのんびりと生活してた青白い琅・佐藤凍（さとうこおる）はフェンリル（笑）である。転生者（笑）でもある。
色々とあって村を出ることになった彼はとりあえず頑張ろうか？の精神で生きていく。旅を共にする幼馴染は若干壊れているがなんとかならないか？　ならないな。

1話　旅は唐突に（前書き）

魔法の無いファンタジー考えてたらこんな話になりました。
魔法はないけどトンデモ武器はあるよ？

1話　旅は唐突に

獲物を発見した。
俺が居る木の真下、木の根元に蠍みたいな青白い魔獣が居る。鋏の先には猫耳の兎が捕えられている。動かないってことは死んでるみたいだ。
今日は大漁だな。
蠍を見下ろしていた木から蠍に向かって飛び降りる。蠍が俺に気付く前に空いている鋏を爪で貫き地面に叩き付ける。
急なことに反応できない蠍の顔にパンチ。
と言っても俺の手でパンチしようものなら爪で突くような攻撃になる。頭の骨ごと脳らしき柔らかくてグニャッとしたものを貫いた。
蠍は一瞬ビクッと体を痙攣させて動かなくなる。兎はやっぱり死んでいるようでそのまま俺の食料決定だ。
今日は中々のご馳走だな。特に蠍の尻尾は火で軽く焙るとプリップリの海老みたいな食感と味、仲間内で取り合いになる前に食わねば！

俺は人里離れた森に住む氷狼族。幻琅族と呼ばれる狼の1種族だ。体格的にはもののけ姫の子狼を連想してくれ。あれで青白い毛だと思ってくれれば大体あってる。毛にしては硬くて人間曰く氷殻らしい。モンハンみたいなネーミングだがこの世界にリオレウスなんて飛竜は居ない。似てるのは居る。
さて自己紹介を続けよう。佐藤凍（さとうこおる）、オス、１６歳。俺のプロフィールだ。
ファンタジーの名前じゃないって？　知らん。人間はニーナとかジョンとか呼ばれているのを聞いたことがあるが魔獣の名前でそんなのは聞いたことがない。友達には山田花子なんてのも居る。

俺の住んでいる村は森の奥深く、人間が入って来れないような場所にある。森の浅い範囲にはゴブリンが生息していてよく人間と小競り合いをしている。少し深く森に潜ろうとすればキングゴブリン（5メートルくらい）がダッシュで追っかけてくる。ちょっと前に人間の大部隊が討伐に来たらしいが全滅したと聞いた。
誰に？
ゴブリンの友達に。

それでもどうにかゴブリンを出し抜いて森の中腹に入ると今度は昆虫系の魔獣に襲われる。特に評判が悪いのはワームだ。ヌメッた芋虫みたいな見た目で人間丸呑みにするような魔獣なんだが気持ち悪がられると傷ついてショボーンとする。ちなみに山田花子だ。
繊細で傷つきやすい奴なので優しく接してあげてほしい。魔獣は見た目じゃないんだよ！

さて、興奮した頭をちょっと冷やそう。
爪に氷を纏わせて冷えピタ代わりにする。お～、冷たくて気持ち良い。
落ち着いたところで村が見えてきた。今日は隣村から幼馴染が来ている。
あいつなら蠍の尻尾も上手に焼けるだろう。ちゃんと焼いてくれたら半分くらいは分けてやろう。

「ただいま」
「あっ！　お前なんで村に居なかったんだよっ！　速く村長の所行ってこいよっ！」

近くに居た見張り係に挨拶したら怒られた。
俺が狩りに出るのは昨日の内に話してあったはずなんだけどな？
理不尽に怒られてる気がしてならないが何も言わずに村長の家に向

かう。狩った獲物は村長の家に行く途中で俺の家に置いていった。
親に食われそうだったから尻尾だけは食わえていった。
これだけは譲れん！

「こんちわー。村長、見張りからの伝言で来ましたよー」

村長の家の前で扉をノックしてから来客だと伝える。『待ってろ』
と村長が言い終わる前に扉が凄い勢いで内側から開く。
咄嗟にバックステップで直撃は避けたが村長宅から俺に向かって飛
び出してきた影までは避けきれなかった。

「ひっさしぶりー！」

飛びかかってきたのは炎のように紅くてフワッとした毛並みの狼。
炎琅族の林焔（はやしほむら）、１６歳、メスだ。
林が燃えてしまうとか言うツッコミはなしで。一部のオスは萌えて
しまうらしいが、俺の幼馴染です。
炎琅族とは爺さんの代まで敵対関係にあったが今の村長同士が無益
な争いに終止符を打ってからは隣村ということで仲良くやっている。
今では氷琅と炎琅のハーフまで居るくらいだ。

「会いたかったよ、凍〜！」

グイグイと顔をすり寄せてくる。オスとしては嬉しいが正直離れて
ほしい。焔の親父さんがモノっ凄い笑顔でこっちを見ている。ただ
し目は笑っていない。
口パクで何か言っている。

『後で山裏来いや』

絶対に行きませんとも。

「再開を喜ぶのはその辺にして中に入れ。乳繰り合うのは後にしろ」

威厳のある声に焔がピシッと背筋を伸ばして俺から離れる。
声の主は氷琅族の村長、年は５４と中々年寄りだが未だに負け知らずのトンデモ爺さんだ。
さて、俺が呼ばれたのは他でもなく焔が居るからだろう。焔は俺くらいの年の奴らからかなりのアプローチを受けている。その護衛係が俺だ。
幻琅はどの種族も『好きな相手は力尽でモノにしろ』と考えているから焔は結構襲われる。そんなとき白羽の矢が立ったのが同世代では腕も良く、焔を襲わない（焔が襲われても良いと言った）俺だったので親父さんの頼みで焔が村に来た時の護衛をしているのだ。
睨むな、理不尽だ。

とにかく村長宅に入る。
机の上には鍋とスープが置かれている。キッチンから人化した村長夫人が人数分の皿とスプーンを持ってきた。

「さっさと人化して席に着け」

幻琅族は狼の姿から人間の姿になれる。と言っても髪は俺なら青白くてストレート、焔は紅くてフワッとしている。これが人間とは大きく違う特徴だろう。
村長に言われたとおり人化し席に着く。

「さて、凍、お前に命令がある」

１６歳に何を頼む気だ（魔獣は大体１８で成人）。

「炎琅族の村に行け。雷琅族との抗争が本格化したら、子供たちを守れ」

「明らかに荷が重過ぎるっ！」

思わず叫んでしまった。まさか子供にそんなこと頼むとは思わなかった。

「まあ待て、話は最後まで黙って聞け。質問は後で聞く」

今直ぐ断りたい。

「何もお前だけというわけじゃない。お前はあくまで予備の予備。本当にどうしようもなくなった時に子供たちをこの村に案内するだけだ」

追っ手の雷琅がロリコンだったらどうすんだよっ！　てか雷琅ってオスもメスも繁殖に積極的だって聞いたぞ？　下手したらショタコンに狙われるっ！？

「ちなみに今の雷琅族は同性での行為が流行っているらしい。精々掘られんように気を付けろ」

余計心配になったわっ！

てか気を付けなきゃなんないのはメスじゃなくてオスかよっ！

せめて綺麗なお姉さんに襲われたかったよっ！

「凍、お前の幼馴染の村が雷琅に蹂躙されるかもしれないのだ。幼

馴染の不安を少しでも和らげようという気概はないのか」
「そんな気概はホモレズ話で吹き飛んだ」
どうせなら焔とお姉さんの絡みを眺めたいくらいだ。美少女がお姉さんにアフンアフン言わされている光景……アリだな！
逆に自分が野郎に掘られている姿……吐きそうだ！
「腑抜けが。だがこれは決定事項だ。この村にお前の帰る場所は無い」
「この悪徳村長っ！」
「では細やかだが宴を開こう。氷琅と炎琅との協力を祝してな」
この会話に焔や親父さんは終始無言だった。ちょっと気まずそうだったのが腹立たしかった。

2話　旅路はイベントに（前書き）

前回の荒筋：村から追い出されました

2話　旅路はイベントに

翌日、本当に俺は家から追い出され隣村に行くことになった。
他にも炎琅の村に行くことになった奴は結構居るみたいだったが、同年代のオスは皆焔が狙いみたいだ。目的分かってんのか疑問だが言っても始まらない。

昨日の宴の間はやけ食いして気分を紛らわせていた。焔は何度も俺の方に来ようとしていたがオスたちに足止めを食らって中々来れないようだった。
俺は他の肉を食ってから尻尾を焙ろうと火を探していたら焔に捕まり、仕方なく仲良く尻尾を分けあった（殻ごと炙って中には熱だけ通すのがポイント）。
狩ったのは俺だが炙ったのは焔だ。食い物は狩った者にも調理した者にも食べる権利がある！　というのが俺の持論だ。
俺と焔が一緒に尻尾を食い始めてから嫉妬の視線が凄かったのは思い出したくもない思い出だ。

で、森の中。
先頭は親父さん、次に焔、俺。その後ろに氷琅が3匹（オス2のメス1）。これだけの戦力なら人間の国の1つや2つは簡単に落とせるが無意味な上に時間と体力の無駄なので誰もしない。
大体人間を襲ってもメリットが無いのだ。食える部分は少ないし美味くもない。人間を襲っても何も得られないのだ。

「凍は私たちの村に来たことないよね？」

思い出してみると焔はよく氷琅の村に来たが俺が炎琅の村に行ったことはなかった。

「じゃ案内するよ！　何から行こうかな？」

おーい、俺はＯＫ言ってないぞ？　まあ断る理由もないし案内してもらうか。どうせ俺は狩りくらいしかすることないしな。

「あ、そう言えば凍ってお風呂大丈夫？」
「水浴びじゃなくてか？」
「うん、熱湯」
「温度による」
「じゃあ試そう！」
「はいはい」

暑いのは苦手だが、まあ何とかなるだろう。
炎琅の村までは歩いて3日はかかる。その間、焔に群がるオスたちが色々と不安だが村長が選んだんだしそこまで酷いことにはならない……と信じたい。

その夜、持ってきたゴザを広げると焔寄ってきた。さっきまでは唯一のメス同士で野宿の準備をしていたのだがどうしたのだろうか……いや、分かってるよ。そんじょそこらの鈍ちん主人公と同類扱いは御免だ。
何も言わずにモジモジしているところを見ると俺の予想はかなり正解に近そうだ。焔の後ろではメスが木陰から覗くフリして俺に無言の圧力をかけてくる。
これは俺が悪いのか？

「どうした？　眠れないのか？」

『一緒に寝るか？』などと言ったら間違いなく親父さんはキレる。あくまで焔から言ってもらわないと俺の命が危ない！

「えへへ……やっぱり、不安みたい」

「当然だろ。さっさと寝ようぜ」

ゴザにもう1匹なら寝れるスペースを開けて横になる。これなら焔が自分から入ってきましたと言い通せる！

ちょっと自分が情けないと思った。

翌朝、習慣で日の出と共に目が覚め周りを観察する。普段だったら見慣れた自分の部屋だが今日は外でゴザを敷いただけなので木が乱立する森の中だ。

さて、誰も起きていないようだし今の内に離れて……人化した焔が俺の前足を握って離さない。

……どうしよう？

仕方ないので焔の顔をペシペシ叩いて起こす。

人化は便利だが俺たちくらいの年だと上手く制御できずに耳や尻尾が残ったり、寝ている間に変わってしまったりするのだ。耳と尻尾だけなら獣人と言い貼れる。

人化する回数が多い奴ほど寝ている間に人化しやすいらしい。

俺は人化することはできるが滅多にしないので寝ている間に人化した経験はない。

人化する際は何故か服を着た状態になる。人間は普段から服を着ているからだろうと村長は言っていた。人化はできるが何故できるのかは誰も知らないのだ。

ちなみに服を脱いで狼に戻ると毛が少し薄くなるらしい。試したこ

とないから分からん。

「ぅ〜……おはよ」

「おはよう」

ようやく起きた焔はまだ俺の前足を握ったままだ。

あ、親父さんが起きる。早く離せ。

「おはよう、お父さん」

「おう……朝飯食ったら行くか」

離してもらえなかった。

親父さんの視線怖いな。

朝食の干肉を仲良く分け合って出発。炎琅の村まであと2日、それまで親父さんに殺されないように細心の注意を払わなければ俺は死ぬ！

焔が気を付けるだけでもかなり安全なのだがそうは問屋が卸さない！

昨日1日で俺は学習した。焔は親父さんの視線に気付いてない。

焔、前から思ってたけど、お前鈍すぎ。

昔から襲われるまで相手の気持ちに気付いてなかったんだな。そりゃオスたちも襲うなんて強行手段とるって。アタックしても気付いてもらえないんじゃ分かり易いことするしかなかったって。肯定する気はないけどな。

「あの崖道を北に進む。踏み外して落るなよ」

森が晴れた先は断崖絶壁になっていた。この崖沿いに進むと向こう側に渡れる橋がある。橋と言っても大木を倒しただけだが。

下を覗いてみるとかなり深いことが分かる。ついでに崖の下は激流だとも分かった。

落ちたら人生終了のお知らせか……怖っ！
まあこんな場所で幻琅の一団に喧嘩売るような馬鹿は……
目の前に殺気立った6本足のカマキリ（体長2メートル）×5
居たよ。と言うか俺の思考がフラグだったよ。なんでこんな時にこんなフラグ立ててるんだよ。多脚だからこんな足場でもヘッチャラなんだぜとか卑怯臭いよ。てか虫が狼に喧嘩売るとかヒエラルキー無視し過ぎだよ。そして俺のツッコミ長いよ、多いよ、現実逃避止めろよ！

「何でこんな所にっ、邪魔だ！」

先頭の親父さんが『キシャーッ！』とか威嚇してくる目が赤く発光しているカマキリに飛び掛り頭を噛み砕く。
でも親父さんは何に驚いたんだ？
って、あっ！　カマキリの脳はカニ味噌みたいで美味いんだぞ！
それをグチャ味噌にするなんて勿体ない！

「やりやがったなっ！」

親父さんに群がるカマキリの内の1体を横から突き飛ばし、倒れたところで首だけ切り離す。氷の爪は鋭くて便利だ。
焔は炎を纏った体当たりで1体倒したみたいだな。首は無事のようだ。

「なっ！」

一瞬で自分たちが不利になって驚いたか？　だがまだだ！　カマキリ味噌の美味い食べ方を模索するためにもお前達には犠牲になって

もらう！

「おいっ、どうしたっ？」

……森から一杯カマキリが来てしまった。正確には何体かって？

一杯だよ！

緑色だから森に同化して見えづらかったんだろうな。湧いてくるとしか言いようのない増え方だ。

後ろは崖、前はカマキリ一杯……積んだな。

幻琅族には竜族が使うブレスなんて便利なものはない。氷にしても炎にしても纏うだけで飛ばせない微妙に使いづらい能力なのだ。人間はそれすらできないのだからマシだと思おう。

「凍、どうしよう？」

「……逃げるしかないな、それもバラバラに」

固まってたら狙い撃ちにされるだけだ。多分運の良い１匹くらいが生き残れるだろう。

……意味無いな。

「やだ」

「却下だ」

林親子に駄目言われてしまった。どうしろと言うのだ。

「相談は終わったかよ？　ええっ！」

リーダーっぽいのが声を荒らげてズイっと前に出てくる。ちなみに他の３匹と分断されてて様子が分からない。きっと俺たちと同じ状態だろうから気にしてもどうにもならないな。

「仕方がないな」

お、親父さん妙案があるのか？

「凍、焔のこと任せたぞ」

「は？」

何を言ってやがるんだ？

そう思ったら親父さんは炎を纏わせた前足を地面に向けて叩き付けて、

ピシッ、ガラガラガラガラ

崖崩しやがったーっ！！

「アホーーーーーーっ！」

「きゃあああああああっ！」

激流に落ちる前に見えたのは親父さんがカマキリに突撃する姿だった。

2話　旅路はイベントに（後書き）

今回の纏め：親父さんがトチ狂った

3話　放浪は出会いに（前書き）

前回の荒筋（嘘）：とうとう姿を現した魔王が勇者たちにその毒牙を伸ばす。次々と倒れる仲間を前に勇者は目の前の3択に悩む。

逃げる

逃げる

逃げる

勇者たちの明日はどっちだ？

3話　放浪は出会いに

崖下の激流に飲み込まれてしまうと狼の体では上手く動けない。犬掻きくらいならどうにかなるが焔と離れないようにするのが難しい。だから俺は人化して焔を掴まえた。向こうも人化した。
親父さんの無茶な判断で一緒にされたが1匹より2匹の方が良いに決まってる。不安に押しつぶされて自滅なんて笑えないからな。

「凍っ、あっちに岸がある！」
「間に合うか？」

とにかく泳ぐ。岸に着く前に通り過ぎても壁沿いならば何かあるかもしれない。

「凍っ、後ろ後ろ！」

今度は何だ？
木の幹だった。
って無茶だろっ！　何で慣れない人間の姿で激流の中泳いで木に直撃コースなんだよっ！
まあ誰に文句を言っても状況は変わらないわけだが。
仕方ないので焔を庇って木の直撃に耐える。超痛い。
流れてきた木に人化した状態で上に乗る。狼の姿だと大きすぎるんだよ。人の姿だと丁度良い。
ズブ濡れで木の上に這い登るとようやく一息つけた。色々ありすぎで疲れた。

「……どうしよう」

焔が不安そうに呟く。
濡れた服は体に張り付いて細いが健康的な体のラインを晒している。
焔って人化しても美少女なんだよな。
今はそんな場合じゃなくて！
激流の先を見る。
これだけ流れが速いってことはもしかして滝か？
予想的中、少し行ったらメッチャ開けた風景が見える。完璧に滝になってるな。

「焔、滝だ。はぐれるなよ」
「えええええええええええっ！？」

それくらい気付いてくれ。
焔を抱き寄せしがみつく。これ絶対勘違いされるなと思うがそうも言ってられない。向こうも内心はどうあれ俺にしがみついてくれた。
これで離れ離れにならないといいんだが、ここまで来ると賭けだな。
そんな風に考えていたら滝に入口が見えてきた。あと3秒くらいだ。

「凍、絶対離さないでね」
「お前もな」

激しく揺らされながら滝壺に飲まれた。

……生きてる？
生きてるよな？
ガバっと立ち上がり周囲を警戒する。人間や魔獣が近くに居たら襲われかねない。

……居ないみたいだな。
滝壺がプライベートビーチみたいになっててかなり広い。パラソルとチェアさえあれば南国気分を味わえそうだった。
焔が居るのは分かってた。互いに相手のことを離さなかったらしい。
幼馴染万歳！
焔の顔をペチペチ叩いて起こす。何かデジャブ。

「ぅ～……凍っ！」
「おはよう」
「あ、おはよ。じゃなくてっ！」

言いたいことはわからんでもないが、正確には汲み取れないな。俺は鈍いってわけでもないけど鋭いって程でもないし。

「う～、もういいよ。それよりも、ここどこだろう？」
「分からん。とりあえず人化したままで探索しよう。人間に見つかると面倒だ」

魔獣なら相手が誰だろうと攻撃する時はするけどしない時はしない。でも人間は俺たち幻琅を見つけたら必ず攻撃してくる。
御伽話なんかでは心優しい女性が怪我した魔獣を治療して仲良くなるなんてのもあるが、そんな奇特な人間がそうそう居るはずもない。
とりあえず焔に炎を纏ってもらい服を乾かす。

「私たちだけになっちゃったね」
「そうだな」

実は焔はオス恐怖症と言うか、オス限定の潔癖性みたいなところがある。そりゃ何度も襲われたらなるか。俺はメスに襲われたことはないから分からないが。

どうせイケメン成分少なめですよフンッ！

「でも、一緒に居るのが凍で良かった」

で、襲わなかった俺に懐いた。美少女に懐かれるとかちょっと犯罪の臭いがするな。俺のことだけど。

「そりゃ光栄だ。さ、行こう」

ここをプライベートビーチにしたいとは思うが今は無理だ。ここは仕方なく諦めてやろう。

「うんっ！」

そ、そんな嬉しそうな顔したって襲わないんだからねっ！
普通のことだっての。てか野郎のツンデレとかキモいな。自重しよう。

ふと思う。俺たちの髪は青白いストレートと紅くてフワッとしたロング。この髪じゃ人間から相当怪しまれると思う。
何度か森の浅いところで人間を見たが黒、金、赤、茶くらいしか見たことがない。
もしかして、人化してても襲われる？
人間って面倒だな。

まあ俺も元は人間なんだが。

ファンタジーの世界の狼が『もののけ姫』を知ってる訳がない。ツンデレなんて単語皆知らないしな。
それ以前に自分の名前と人間の名前を比べて不思議がることなんて

まず有り得ない。生き物って自分の環境に疑問を持たないものらしいぞ？　俺は学者じゃないから詳しくは知らないけど。
まさか部活中に熱中症で死ぬとは思わなかった。再発防止運動とかしてくれると嬉しい。あのクソ顧問に対して復讐になるから。
俺って根暗。

「凍、このまま帰れなかったらどうする？」

……考えてなかった。

「私はね、凍と一緒ならなんでも良いよ」

美少女にこんなこと言われたら堪りません！　何もしないけどなっ！
そこっ、ヘタレとか言わない。
どこぞのファミレスの厨房バイトは４年も同僚のフロアチーフにノーアタックだったんだからなっ！
自分が何を言ってるのか分からなくなってきた。全然関係ないこと言って誤魔化そうとしたけど意味不明になっただけだったな。

「はいはい。それより鼻で同族の場所が掴めないのが痛いな」
「もう、いつもそうなんだから！」

テキトーに流したら怒られてしまった。
今そんなこと話してる余裕ないから！　それどころじゃないから！
まずは安全を確保しないとな。
１６年も狼として生きてると人間の美少女より狼の美少女が良くなるから不思議だ。人間だった頃にはできなかった動物の見分けも今では簡単だしな。
ってまた脱線してしまった。
は～、もう最初に会ったのが魔獣なら村への戻り道聞く、人間だっ

たら同行して幻琅の情報集めて村に戻る。これでいいや。
昔から計算した行動とか後先考えるとか苦手だったしこんくらいで丁度良いだろ。焔は……今の状態じゃ何聞いてもまともな答え返ってこなさそうだ。

「最初に会った奴に幻琅の情報聞いて、それを元に村目指すって方針で良いか？」

一応聞いてみる。

「うん！　それで良いよ！」

あ、何も反論ないのな。後先考えなさすぎなプランだったから人間は避けようとか昆虫系の魔獣避けようとか言われると思ってたんだけどな。

「凍のしたいようにして。私はそれに従うから」

何か依存されてる？　まあ俺以外のオスに懐かない時点でそんな気はしてたけど……止め止め、考えたって答えなんて出ない。
あ、森抜けるな。人間が作った街道がある。

「おらおらっ！　出すもん出せよ！　金も飯も女もだっ！」

何か豪華な馬車がボロボロの服着た男達に襲われてる。

3話　放浪は出会いに（後書き）

今回の纏め（嘘）：勇者は自分の力不足を嘆き新たな力を得るために旅に出た。霊峰と呼ばれるドラゴンに巣に伝説の破魔の剣があると聞き向かうがあまりの寒さに仲間の魔法使い見習いに頼むことにした。

魔法使い見習いの活躍にこうご期待

4話　王族は協力者に（前書き）

前回の荒筋（嘘）：知恵と勇気で破魔の剣のある霊峰の頂上まで来た魔法使い見習いは震えていた。自身の目の前のドラゴンの圧倒的な存在感に。自分を無理矢理霊峰に放り込んだ勇者に色々と言いたいことがある魔法使い見習いの前には3択が用意されていた。

さっさと逃げて勇者をシバク

ドラゴンに頼んで勇者をシバク

破魔の剣で勇者をシバク

麓の村でヌクヌクしている勇者の明日はどっちだ！

4話　王族は協力者に

鎧を着た人間が何人か倒れてる。鎧の隙間から矢の羽の方が見えてるな。ご愁傷さま。

「くっ、山賊風情がっ！　隊列を乱すな！　盾部隊は周りと協力して守れ！」

1人だけ装飾が違う鎧の人間が怒鳴りながら指示を出している。騎士の隊長か何か？

「馬車にゃお姫様が居んだ。お前等、今日は楽しむぞっ！」

「「「おおおおっ！！」」」

分かり易い動機だな。

「凍、見つけちゃったよ？」

顔近づけて可愛らしく言わないでくれっ！　まさか最初に会うのが山賊と人間の国の王族だなんて思わなかったんだっ！

王族なら幻琅についての情報も簡単に集められるか？　しかしアングラな情報なら山賊も負けてないかもしれないし……悩む。

とりあえず様子見だな。どっちも俺たちのこと攻撃してきそうだし。

山賊と騎士団（？）の戦いを眺めていると山賊が優勢だと分かった。武器に毒を塗っているみたいで掠り傷しか負ってない騎士が少ししたら急に動きが鈍くなる。その隙を突かれて殺されている。

しかも騎士の弓兵は真っ先にやられたみたいで山賊に遠距離から好き放題攻撃されている。

これはお姫様終わったな。
残りの騎士は3人、山賊は9人。
馬車の中に居るとしても2人くらいだろう。前衛に釘付けにされてる間に弓で攻撃されて終わりだ。
すると馬車から誰か出てきた。ここで援軍出しても遅いだろ。

出てきた人間は騎士とは明らかに違う高級感溢れる服を着ていて、金髪碧眼でレイピアを持っていた。慣れた動作で山賊に向かってレイピアの切っ先を向ける。

「私はキスタニア王国第3王子、ギルバート・キスタニアだ。山賊共、相手をしてやろう」
「男かよっ！」
「「「男かよっ！」」」

王女じゃなかったのかよ！　しかもイケメンかよっ！
……はっ！　しまった、つい大声でツッコんでしまった！
山賊も騎士も王子とやらも俺たちの方を見ている。こっち見んな。

「親方っ、女が居ます！　女！」

あ、焔に気付いた。

「おっしゃーっ！　野郎どもっ、馬車はハズレだったが女は居たぞっ！　今夜は寝かすなっ！」
「「「おおおおおおおっ！」」」

何だか凄く馬鹿な光景を見てる気分だ。

「彼らを守れ！　一般人を巻き込んだとあっては騎士の恥だ！」

「「「おおおおおおおっ！」」」

元気だな。とりあえず焔の手を引いて逃げる。
戦っても良いが人間じゃないとバレると面倒なことになりそうだ。
山賊だけなら1人だけ残して殺せばいい。情報提供者って大事だよな。
問題は騎士だ。王子殺したら捜索隊が編成されてどっかで足止め食らいそうだし生かしておいたら礼がしたいとか言い出しそうだし……関わらないって無理か？

「今日は大胆だね」
「そんな甘酸っぱい展開じゃないだろ！」

焔さん超呑気。多分人間が触ろうとすれば灰になる程の炎を纏う気なんだろうな。それやると目撃者消すのが面倒なんだよな……でも1番確実か。
考えることを放棄して追ってくる山賊の方を向く。短剣で切りかかってくる山賊の右腕を氷の爪で切り落とす。
俺に向けて放たれた矢は避ける前に炎を纏った飛び蹴りで焔が消し去った。
山賊の絶叫が森に響く。

「ば、化物だ！」

人間には炎も氷も扱えない。一応転生者の俺から見て魔法のような攻撃はあるのだがよっぽど強い奴が最終手段のように使っているのしか見たことがない
あれは今だになんなのか分からん。
そんな風に考えごとをしながら体を動かしているといつの間にか山賊は全滅していた。鋭利な刃物で切られている者、炎で焼かれた痕

がある者など死に方は２通りだ。
そんでもって騎士と王子にその一部始終を見られた。
うわ、騎士たちは化物見る目だけど王子はｗｋｔｋした顔にしか見えない。この変態め！

「そこの娘、私の嫁になれ！」
「死ねば？」

随分と短いやり取りでした。

「きっ、貴様！　王子に対して不敬であるぞっ！」

あ～あ～、隊長っぽい人が凄い怒ってるよ。マスクの下じゃ顔真っ赤だろうな。

「何言ってるの？　私はその人が統治してる土地の住人じゃないんだから敬意なんて払わないよ。あなただって自分とは無関係の統治者に敬意なんて払わないでしょ？」

騎士たちがポカーンとしてる。あんな風に正論言われたらどうしようもないか。

「くっ、はははははっ！　益々気に入った！　見た目ばかり着飾って内面を磨かない浴の塊のような女には飽き飽きしていたのだ！　おい娘、どうしたら私のモノになる？」

あいつ、焔をモノ呼ばわりしたか？
……それにしても王族の男って女に苦労しないのな。こちとら前世の１３年間で彼女が居たことがないからその辺の機微が分からん。

「死んでくれたら1秒くらい悲しんであげる。2秒で忘れるけど」
何とまあ、思いやりのない優しさだな。
「ふっ、どう足掻いても死ぬしかなさそうだな。この話はここまでにしておこう。
さて、私を助けてくれたのだ。礼くらいさせてくれ」
「凍、どうする？」
お約束！　そしてここで俺にフルな！
騎士たちが『え、来るの？』的な視線になってるし、隊長に至っては『王子の申し出断るなんて有り得ないよな？』と訴えている。王子はライバル見るような感じだし焔は心底どうでも良さそう……四面楚歌？
「じゃあ幻琅の情報くれ」
城に招待するなんて言われたら堪ったもんじゃないから当初の予定通り幻琅の情報を聞くことにした。
「ほう、面白い要求だな。私としては城に招待して食事でもと思っていたのだが」
「そんな堅苦しくて居心地の悪い礼は迷惑だ」
「ふっ、そうれもそうだな。あのような格式張った場所では礼にならん。だが生憎私は幻琅の情報を持っていない。すまんな」
「幻なんて言われているんだ、そう簡単に見つかるとは思ってない」
さて、どう探したものか。
「だがそう言った情報が手に入りやすい場所ならば心当たりがある

ぞ」

お、有力情報？

「ギルドに入れば魔獣の情報も聞けるだろう。紹介状と寝床の確保くらいはしてやるぞ」

つまり焔のところに通いやすくしたいんですね、分かります。分からねえよ！

思わず1人ノリツッコミしてしまった。

「ギルドに入るには紹介状が必要なのか？」

「有ったほうが怪しまれないというだけだ。お前たちの髪は目立ちすぎるからな」

確かに。こんな怪しすぎる2人組の素性を効かない辺りこの王子踏み込む距離は上手く測ってくるタイプみたいだな。人間の髪に青白いとか紅いとかないからな。

「では、王都に行くか。付いてくるかはお前たち次第だ」

４話　王族は協力者に（後書き）

今回の纏め（嘘）：激しい戦いのさなか、魔法使い見習いとドラゴンは確証のない信頼を互いに感じていた。そして戦いが終わったときドラゴンは驚愕の事実を話すのだった。

「え、破魔の剣は５００年前に折れたけど？」

「えええええええええええっ！」

「それよりも、お前が気に入った！　結婚しよう！」

「えええええええええええっ！」

異種族間の恋の行方はどっちだ？

5話　出会いは武器に（前書き）

前回の荒筋（嘘）：竜に告白された魔法使い見習いは破魔の剣が壊れたと知り意気消沈。失意の中霊峰を降りたら勇者が待ってて聞いてきた。

「その赤毛、誰？」

まさか竜が一緒に来るとは思ってなかった魔法使い見習いに勇者が言った。

「竜居たら破魔の剣なくても平気だろう？」

魔王と戦わされそうな竜の明日はどっちだ？

5話　出会いは武器に

王子と会ってから1時間くらい歩くと王都が見えてきた。ちなみにもう夕方。
道中の王子の話だと王都の中央に見える低いモンサンミッシェルみたいなのが城らしい。塔2つってかなり面倒じゃないか？
まあ塔同士は近いし間に空中通路みたいなのもあるから平気なのかもしれないな。

「王都に着いたら宿を確保するぞ。ギルドの登録は明日にする」

確かに今からだと説明とかが終わったら真夜中になってしまう。それは面倒だ。

「王都キスタニアの大通りには街灯が設置されていて夜でも外出できる程度には明るいが、やはり昼よりも問題が起こりやすいからな」

今日明日の金は出してくれるらしい。あと俺たち用の家も用意してくれると言っていた。焔への下心を隠そうともしない対応だな。ん？　隠してなかったら下心とは言わないのか？
どっちでも良いな。

王都の入口に居た見張りは王子の連れということで俺たちのことはスルーした。王族万歳。
中世ヨーロッパみたいな石畳の街並みにオサレな街灯が等間隔で並んでいる。パトロールの騎士が果物屋のオバチャンと気安く挨拶しているところを見ると治安は良さそうだ。しかし騎士は鎧で一般人はジャンパーとかチェックのシャツやパーカーってどんな文明レベルなんだ？

相場よりもちょい安の宿を騎士に紹介してもらい明日迎えを寄こすと言われた。と同時に王子が騎士から金の入った袋とシンプルな指輪を2つ受け取って俺たちに渡してきた。
金は分かるが指輪は何だ？

「キスタニアの王族はいつ誰に助けられてもきちんと礼ができるように目印を常備するのだ。その指輪は私を助けた証というわけだ」

ちゃんと通じるんだろうな？　お役所仕事で知らない奴が多かったりするイメージがあるんだが。

「あ、王子。何でウチの前に？」

何か宿から体格の良いオバチャンが出てきた。しかも王子に対してかなりフレンドリーだ。

「ああ、私の恩人を泊めて欲しくてな。部屋は空いているか？」
「2人部屋なら空いてるよ。晩飯まで少しあるけどどうするんだい？」
「ならば武具でも見に行くとしよう。その部屋は空けておいてくれ」
「はいよ。若い男女が同じ部屋〜っと」

あ、王子の表情が曇った。オバチャンはニヤニヤしてる。勘鋭いな。そして焔はしょっちゅう俺と一緒に寝るぞ。狼の状態でだが。
やっぱ人間と狼じゃ価値観違うな。

オバチャンに挨拶してから王子に連れられ武器屋と防具屋が並んでいる通りへ。
しかし武器か……俺も焔も武器使わないから剣とかかえって邪魔なんだが。攻撃されても幻琅の体って人間の鎧より丈夫だから防具も

意味ないしな。

「お前たちは剣など使わないみたいだがそれでは怪しまれる。最低限の装備はしておいた方が良いぞ」

心遣いには素直に感謝して武器を見る。剣にナイフ、斧に槍、ハルバートなんかもあるな。遠距離武器では弓やボウガンに銃……銃！？　何か急におかしな物が出てきたぞ。

それも拳銃サイズからライフルサイズまで色々だ。

実はこの世界の武器にはどれも宝石みたいなのが付いている。魔石と呼ばれる魔獣の糞だ。これが無い武器は魔獣にダメージが通りづらい。色は様々だが属性がどうこう言うわけではない。ただ魔獣の体内で固まる成分の色が違うだけだと言われている。詳しいことは知らん。

ちなみに魔石の力が切れたら交換する必要がある。武器を持っている人間は大体自分の武器に合う魔石を2個くらい常備しているらしい。そもそも魔石の力はよっぽど使い込まないと切れないから交換するのは年に1回くらいだと聞いたことがある。

「あのボウガンの隣に置いているのはなんだ？」

「銃だな。小さい物は弓やクロスボウよりも小さい動作で使えるが射程は２０メートルもない。逆に大きい物は射程が長く威力も高いが狙いが難しい、完全に狙撃用だ。他にも放射状に弾が出る散弾なんかもあるが、これは近距離用だな。

ついでに言うなら普通は年に1度の魔石交換が半年に1度は必要になると言われている」

燃費悪いな！

「王子、その知識はちょっと古いぜ。ここに置いてあるのは改良型

で１０ヶ月に１度くらいだ」
店主のオッチャンが訂正を入れてきた。半年から１０ヶ月って大分伸びたな。
あ、この銃は、
「坊主、その銃に惹かれたのか」
「ああ」
俺が惹かれた銃はリボルバーみたいなデザインの拳銃タイプだがバレルが分厚くて衝撃に強そうにできている。何故か俺はリボルバーが好きだった。あの回転弾倉にどうしようもなく惹かれるのだ。どう考えてもデザートイーグルのようなマガジンタイプの方が装填の効率は良いと思うのだがこればっかりは好みの問題だ。まあ玩具の銃すら持ってなかったがな。
「オッチャン、この銃って殴ったりしても壊れないか？」
「そいつは殴ることを想定して作られた銃だ。ちょっと離れた距離も攻撃できる棍棒みたいなもんだぜ」
オッチャンがニヤリと俺を見ている。
まさか銃衝術用の銃をこの目で見れるとは思わなかった。漫画の世界の産物だと思ってたからな。
「代わりに射程は１５メートルだ」
「弾は単発か？　変えられたりするか？」
「今は単発にしてるが、一応変えられるぞ」
「威力を低くする代わりに散弾みたいにできないか？」
「何ぃ？」

俺は玩具の銃すら撃ったことがないからまともに当たるとは思えない。そもそも普通の銃としての機能を望んでない。
弾はあくまで牽制、メインは格闘で良い。そもそも人目がなかったり敵味方全滅させるだけなら武器なんて無い方が良い。だからこれは俺の趣味。今まで漫画やアニメで使われてきた戦術を俺が試したいだけだ。

「……3日だけ待ってろ。それまでに坊主の望む調整をしてやる。クックックッ、楽しみにしてろよ」

良い数字だ。技術者根性を刺激したみたいだがこの際だ、俺の趣味に付き合ってもらおう。最後ちょっと不安な笑い方だったが……気にしたところで何もできないのだから好きにやらせておこう。

「凍は武器決めたんだ。私も決まったよ」

オッチャンの妻と思われるオバチャンと話してた焔が選んだ武器を持って寄ってきた。何を選んだんだ？
ん？　普通の剣だよな？
でも何か突き刺したら抜けなさそうな返しが刀身一杯に付いている。扱いづらくないか？

「こうするとね、」

持ち手を少し捻りながら剣を振るうと刀身が少し離れ、鞭のような軌道を描き元の形に連結した。
蛇腹剣かよっ！　この店色物多くないかっ！？　個人的には法剣（テンプルソード）でも可！　どうせなら焔には修道服を着てもらいたい！

「あれを一発で使いこなすとは末恐ろしい嬢ちゃんだな。坊主とい

い嬢ちゃんといい何者なんだよ、王子」
「私も詳しくは聞かなかった。だが、面白いだろう？」
「へっ、そりゃそうだ。人の素性なんざ面白さの前にゃ無意味だったな」
ちょっとは気にしろ。有難いけどな。

5話　出会いは武器に（後書き）

今回の纏め（嘘）：南の島でバカンスしてる師匠を迎えに行った魔法使い見習い。竜と勇者もついてきて正直、鬱だった。船を乗り継ぎようやく師匠の下に着いたてみたら師匠は水着でキャッキャウフフ。

「クタバレ糞師匠！」

後に竜は語る。

「やはり魔法使いではなく格闘家だな」

魔法使い見習いの正体やいかに！

6話　登録は衝撃に（前書き）

前回の荒筋（嘘）：４人パーティー揃った勇者一行。魔王との再戦を決意していざ魔王城へ！　と思ったら魔王の方が勇者たちの前に現れた。

「正直魔王やるのが面倒になった。何か面白いことはないか？」

色々言いたいことはあるが魔王の『面白いこと』が想像できない勇者たちは人肌脱ぐことにした。

劇を見る。

海で遊ぶ。

世界征服。

世界の明日はどっちだ？

6話　登録は衝撃に

武具を選んだ翌日、俺たちは王子に連れられてギルドに来ていた。
来ていたんだが、

「趣味悪いな」
「凍、帰ろう」

建物がマゼンタ９０％なのだ。この建物デザインした奴頭おかしいんじゃないか？　恥ずかしくて入りたくないんだが。

「いいから入るぞ。入らなければ何も始まらん」

王子も嫌そうな顔だが入るよう促してきた。
昨日選んだ武器は調整をするらしく手元には無い。だが慣れておくに越したことはないと言われ同種の武器を渡されている。
俺は銃身が分厚いリボルバーを２丁、焔は腰に吊るした鞘に蛇腹剣を収めている。
防具はあってもなくても変わらないのだが王子が面白半分に防具屋で選んだ。
この世界の防具は魔石を装備していれば普通の服でも鎧としての役目を果たす。鎧に魔石を装着すればさらに固くなるので騎士団はそうしているだけだと言う。

で、俺は両腰にホルスターを装備して前の締まった白いロングコートみたいなのを着ている。焔が着ているのは修道服を動きやすくしたような服だ。
あの蛇腹剣、本当に法剣（テンプルソード）と呼ばれる教会御用達の武器の１つだったらしい。ちなみに俺の服も教会の戦闘員が着ている物に近いらしい。

紛らわしいんじゃないかとも思ったが本職は背中に大きな円模様が入るらしい。
教会についての説明は分からないからしない。その内詳しく聞くこともあるだろう。

嫌々ギルドに入る。
扉までマゼンタだなんて、心が折れそうだ。マゼンタじゃないのは精々看板くらいだ。窓枠までマゼンタな辺り徹底しすぎててむしろ清々しい。
だが中に入って安心した。年期の入った木製の建物は西部劇のバーのようだが、荒んだ様子はない。事務所兼バーと言った雰囲気だ。
王子が迷い無くカウンターに進んでいくので後に続く。
周りから俺たちを見ている冒険者たちの視線は友好的ではないが敵対的でもない。本当に観察してるだけって感じだ。

「新人2人だ。登録を頼む」

王子がカウンターに居るアゴヒゲがダンディーな筋肉隆々の男に話しかけた。落ち着いた雰囲気の男はゆっくりと俺たち2人を見てから口を開いた。

「オッケーよ～ん。じゃあこれに書けるとこだけ書いてね～」

出オチ！　初っ端の落ち着いた雰囲気が台無しだよ！　この見た目でオネエとか勘弁してくれよっ！　もう色々と残念過ぎて辛いんだよっ！

「凍、やっぱり帰ろう。他の方法探そうよ！」

是非そうしたいです！

「だが恐らくここでなければお前たちの欲しい情報は手に入らないぞ。こんな見た目だが腕は一流だしな」
「失礼しちゃうわねっ、私は男として男が好きなのよ！」
なお悪いわっ！
「と言うのは冗談で、普通に妻も娘も居るわよ。こんな私を受け入れてくれた大切な家族がね」
良い台詞のはずだけどギャグにしか聞こえない。見た目と話し方のギャップが強すぎて引いてしまう。こんな人、空想の中にしか居ないと思っている時期が僕にもありました。
「さっさと書いてしまえ。私はそろそろ公務に戻らねばならん」
仕方がない。もう色々と諦めて書くことにしよう。
え～と、項目は、
名前――コオル・サトウ
年齢――１６歳
何かコメント――
項目少なっ！　これだけかよっ！？　もっと色々書き込むもんじゃないのかよ！？
漢字だと違和感あるからカタカナで書こうって焔と決めてたけどまさかここまで何も書かないとは思わなかった。
「はいは～い、終わったのね～。コオルちゃんにホムラちゃんね。何々、コオルは私の嫁

あら、大・胆・ねぇ」

シナを作るな色気を出すな息をするな読み上げるな口を開くな俺を見るな今直ぐ書き直させろっ！

焔も何を書いてんだよっ！

「コメントって言うからつい」

「絶対コメントの意味違うからな！」

「アリよっ！」

アリなのかよっ！？

「じゃ、ランクの説明をさせてもらうわね。

ギルドに所属している人は冒険者って呼ばれるわ。冒険者の証の指輪は後日渡すわ。ちなみにギルドってのは旅をしてたり身分証明のない浮浪者なんかでもなれる審査も無しのとんでも組織よ」

自分で言っちゃったよ。

「ありとあらゆる人が寄せてくる依頼を階級に応じて振り分けてるの。依頼の内容も千差万別でね、魔獣の駆除から日曜大工までなんでもあるわ。

でも殺しだけは厳しい制限があるの。殺しの対象は重犯罪者や危険な山賊みたいな死んでしまった方が良い人たちだけ。傲慢かもしれないけど王都に害を為す危険人物にまで優しくすることはできないわ」

シビアだな。死刑執行者みたいだ。

「階級についてだけど、D、C、B、A、Sの5階級よ。

Ｄは登録したての初心者。雑用みたいな依頼を１０個ほどこなすとＣランクよ。魔獣の討伐なんかはこの階級からね。Ｃランクの依頼を２０個ほどこなすとＢランクになるわ。この階級になると山賊や逃走中の危険人物なんかを相手にすることになるの。
で、問題はここから。ＡランクとＳランクには人数制限があるのよ。Ａは２０人、Ｓは５人ね。
年に１回Ｂランクの上位４人とＡランクの下位４人、Ａランクの上位４人とＳランクの１位以外で戦ってもらって入れ替えが行われるの。
Ｄランクの貴方たちにはまだ関係ないしＢランクになるときに確認するから覚えてなくても大丈夫よ。
あ、言い忘れてたけど自分の階級よりも上の依頼は受けられないから気を付けてね。下の階級の依頼も月に受けられる上限があるから受けすぎちゃダメよ？」

最後にウインクされてしまった。
キャー恥ずかしー。
……調子に乗ってすいませんでした。

「じゃ、早速依頼しても良いかしら？」
「大丈夫だ」

昨日王子が教えてくれた話ではＢランクにならないと強力な魔獣の情報は入ってこないらしい。Ａランクになって目立つのは御免だからＢランクを目指す。
焔はどうでも良いと言っていた。こいつ村に帰る気すらないな。

「診療所からの依頼でね、薬草を取ってきてほしいんですって。これが薬草の外見と生えてる場所よ。欲しい数と報酬はそこに書いてあるから行きながら見ておいてね」

メモを渡された。結構親切だな。

「じゃ、よろしくね～」

やっと恥ずかしい建物から出れた。

さて、行くとするかな。

6話　登録は衝撃に（後書き）

今回の纏め（嘘）：面白いことが見つからない魔王は不貞腐れて魔王城に引き篭ってしまった。毎日毎日グータラしてる魔王に業を煮やした配下たちは勇者一行にお願いをした。

「魔王様を前のキリッとした状態にもどしてくだされ」

本末転倒？　意味不明？　そんな魔法使い見習いを置いといて勇者たちと魔王の配下の交渉は進んでいく。そして魔法使い見習いは決意した。

「魔王、ボコそう」

魔王の明日はどっちだ？

7話　昇格は始まりに（前書き）

前回の荒筋（嘘）：働かない魔王をボコッて茶番を終わらせようと考えた魔法使い見習い。勇者と師匠には反対されたが竜はノリ気で再告白までしてきた。それに焦った勇者と師匠も加わって打倒グータラ魔王に燃える一行は魔王と対峙した。

「何故人間に害を為さない魔王が勇者に狙われるのだ？」

魔王のもっともな疑問は魔法使い見習いが面倒臭くなったからだとはだれも思わない、本人以外。

今、勇者パーティーＶＳ魔王の戦いが始まりそう。

7話　昇格は始まりに

ギルドに登録してから2日、俺と焔は雑用のような仕事をこなしてCランクになった。本当に雑用だったのは最早笑った。
雨漏りの修理に消えた鞄の捜索、悪ガキグループの抗争仲裁まで手広くやった。

「ギルドって、大変だね」
「魔獣と戦う方が楽ってのも変な話だな」

本音である。仲裁は本当に面倒だった。最終的に両方に拳骨落として正座させて2時間説教してしまった。
周りに被害を出しておいて『部外者は口を挟むな！』とは良い度胸だと思う。
焔が『凍、カッコイイ』とかキラキラした目で言ってたのは見間違いだと思うことにした。

「今日は採取とかの依頼にしとこう」
「そうだね」

あのマゼンタな建物に向かう。行きたくないが行かねば仕事が無い。
人間は何で貨幣なんて面倒な社会システムを作ったんだ？
王子が前に言っていた寝床だが、王都の外れにある空家を提供してもらうことになった。書類の関係上まだ無理らしいが明後日には移れることが決まった。
宿のオバチャンが凄く残念そうな顔をしていた。焔は男やオスは駄目だが女やメスには好かれるのだ。

ギルドに到着。何か張り詰めた空気だな。

依頼の貼ってあるボードを見る。この前行った森の更に奥にある薬草がほしいとの依頼があった。これなら適正ランクだし受けても構わないだろう。

「リーガル、この依頼受けれるか？」
「大丈夫だ、問題無い」

口調が違うっ！？　誰だこの渋いダンディーなオジサマは！　オネエなリーガルはどこ行ったっ？　そしてそのネタはこの世界のものじゃないぞ！
あ、今更だがギルドのカウンターに居たオネエはリーガルという名前だった。あれでギルド長なのだから恐ろしい。
しかし今日のリーガルはおかしい。表情も心なしかキリッとしている。バーなら女性客で満席になりそうな程に渋くてカッコイイ雰囲気だ。

「こ、凍、この人誰？」
「俺が聞きたいくらいだ」

あまりの事態に喉がカラカラになる。
ギルド全体に漂っていた緊張感はこれか。皆リーガルの変貌に戸惑っているのだ。何がリーガルをここまで変えてしまったのだろうか……

「パパー！」

ん？　可愛らしい女の子が嬉しそうにリーガルに走り寄っていく。

「どうしたんだ？」
「ママが今日の晩ご飯何が良い？って！」

「ははははっ、ママの作る物は何でも美味しいから悩んでしまうな」
ちょっ、おまっ、その幼女お前の娘かよっ！！　そして普段とのギャップが激しすぎてそろそろ限界だ！！
「焔、森に行くぞ。これ以上ここに居るのは危険だ！」
「うんっ、早急にここを出よっ！」
俺たちは自分の心を守るためにギルドを後にした。脱出直前、適正な依頼を受けれずにギルドに残っていた冒険者が泣きそうだったのが印象的だった。
しかし危なかった。下位とはいえ竜種と戦ったときよりもここまでの危機感は感じなかったぞ。流石、元Sランクは伊達じゃないということか。幻琅種2頭を同時にここまで追い詰めるなんて人間の歴史上初なんじゃないか？

調整が終わったという武器を受け取ってから件の森に到着。やはり森は良い、リリンが生み出した文化の極みだ。文化じゃねえよ！
またしても1人ノリツッコミしてしまった。口に出してないからセーフだろう。
さて、今日は武器を試してみるか。狼は食事以外で無駄な殺しはしない。しかし向こうから向かってくる奴だけは相手をする。そのスタンスさえ守っていれば良いだろう。
焔と頷きあって森の中を進んでいく。
「……凍、森の動物たちが変だよ」
焔の言う通り、猿種も昆虫も何かに怯えたように大人しい。森の浅

い場所ならまだしも中腹まで踏み込んだら普通睨むくらいはしてくる。
昔村の近くにワイバーンが来たときと同じだ。つまりこの辺にヤバイのが居るってことか？

「もしかしたらヤバイのが居るのかもな。警戒しろ」
「うん！」

「クルルルルルルルルルルッ！」

「「っ！」」

遠くから聞こえた異質な叫びに2人してビクッとしてしまった。
聞いたことのない叫び方だ。初見の魔獣か？
声のした方に注意しながら進む。遠目だが宙に浮いた黒い何かが見える。
アレが声の主だろうか？　何かと戦っているみたいだ。そして俺たちと同じように遠くから観察して近付いていっている人間が居る。

「凍、戦ってるの、雷琅族だよ」

マジかよ、ここで幻琅に遭遇とか運が良いんだか悪いんだか微妙なとこだろ。でも焔の血の気の失せた顔を見る限り冗談って訳じゃなさそうだ。
戦ってる4つ足の奴をよく見る。黄色くてツンツンした毛並みで俺の狼形態より少しだけ大きい。美少女とみた！
電気を纏わせた太い前足で黒い水の塊みたいなのを殴り飛ばした。
殴られた方は帯電しているのか断続的にバチバチいっている。

「しつこいのよっ！！」

それでもダメージが通っているようには見えない。本当に水を殴っているんじゃないかと思えてきた。よし、黒スライムと呼ぼう。
それにしても、もしかして耐久力の高いスライムか何かか？　いやいや！　あいつらって浮くのか？

そんな風に考え込んで出ていかなかったのが不味かったのか、雷琅が黒スライムに飲み込まれた。
雷琅は苦しそうに藻掻くがどう見ても無意味だった。苦し紛れに電気を全身に纏ったが黒スライムは無反応だった。
苦しそうに気泡を吐き出し、とうとう雷琅は動かなくなってしまった。そして黒スライムがどんどん小さくなっていく。
もしかして、

「雷琅の中に入っているのか？」
「え？」

思わず呟いていたらしい。焔に俺の仮説を聞かれたみたいだ。だがそれが直ぐに当たりだと分かる。
黒スライムが雷琅を覆いきれなくなり、最後には雷琅の口の中に消えていったからだ。
グッタリと地面に倒れた雷琅だったが、少ししたら起き上がった。

目が合う。

それはもうバッチリと目が合った。しかも雷琅の目は赤く発光している。
よく輝くような目とか言うがマジで光ってる目なんてこの前のカマキリ以外で初めて見たな、なんて場違いなこと考えて現実逃避していたが中断させられた。

「コソコソ隠れてないで出てきたらどうだ？　目が合ったのに知らぬ存ぜぬはないだろう」

声はそのままだった。

観念して対峙する。本当は狼形態になりたかったが人間が隠れている前で戻るなんて自殺行為だ。

そして焔まで出てきてしまった。雷琅の様子を見ると気付いてたみたいだし仕方ないか。

「あと１つは、人間か。言葉が通じないとは不便だな。では、お前たちの後に食うとしよう」

本当に、お約束すぎるだろ。

7話　昇格は始まりに（後書き）

今回の纏め（嘘）：熾烈な勇者たちの攻撃をどうにか避けて逃亡した魔王。追ってきた勇者たちに崖に追い詰められたが竜の不用意な攻撃で魔法使い見習いと海に落ちてしまった。目が覚めれば洞窟の中、魔法使い見習いと一緒に困る。とりあえず一時休戦して出口を探そうと決めた2人は互いに手を取り合って洞窟を進む。そして魔王は思った。

（こいつと一緒に居ると感じる胸の高鳴り、これが、恋？）

竜と勇者と師匠と魔王に想われる魔法使い見習いの明日はどっちだ？

8話　遭遇は闘争に（前書き）

前回の荒筋（嘘）：洞窟内で寒気を覚えた魔法使い見習い。魔王の方を見てみれば優しさに満ちた目で自分の方を見ている。敵相手にどうなってるんだと頭を捻ったが答えは出ない。ならばと直接魔王に訪ねてみた。

「共に洞窟を出れたら言う」

勇者たちと合流したらその場で再戦する気の魔法使い見習いからすれば随分と余裕の態度に見えたわけで、

「絶対に負けない！」

「何の意気込みだ？」

奇妙な2人の明日はどっちだ？

8話　遭遇は闘争に

「人間の道具に頼るなどっ！」

飛びかかってくる雷琅を左右別々の方向に避けて挟む。
どうも最初とは口調が違う気がする。最初は普通にメスの口調だったのが今はオスの口調っぽい。

「いっけえーっ！」

焔が抜き放った法剣の刀身が鞭のようにしなって雷琅を切る。鞭の軌道を描く斬撃に戸惑った雷琅はほんの少しの傷に驚いた様子だ。
そりゃ打撃だと思ってたら斬撃だったんだか驚くか。

「面妖なっ！」

俺もやるか。
俺用に調整された2丁拳銃を腰から抜く。同時に雷琅に走り寄りながら乱射する。
注文通りに射程は短そうだが放射状に弾が発射され、至近距離だった雷琅に全弾命中。殴れる距離まで近付いたところで殴打する。

「飛び道具で殴るだとっ！」

飛び道具舐めんな！　某ハンターゲームのボウガンはちゃんと殴れるんだからなっ！
反撃とばかりに振るってきた爪をバックステップで避けながら銃を乱射、側面からは焔が法剣を連続で振るっていた。
圧倒的（2対1）じゃないか我が軍はっ！　言ってみたかったんで

す。

「くっ、このっ！」

ムキになって攻撃が雑になり反撃され余計ムキになる。完璧に悪循環に陥っている。

でも何か弱い者苛めみたいで罪悪感あるな。

幻琅の戦闘力は人化していようが狼だろうが基本は同じだ。多分雷琅の戦闘力は俺より少しだけ低い程度、焔は俺と同じくらい。雷琅が爪や体当たり、噛み付きしか攻撃方法がないのに俺と焔は中距離からでも攻撃できる。

……完全に弱い者苛めだな。

「なあ、もう止めないか？　間合いが違い過ぎるぞ」

「五月蠅いっ！」

「ゴガツバエいっ！」

「は？」

「何でもない」

何となくやってしまった。いつも思うんだ、あの特殊な読みは何なんだ？　小鳥遊（タカが居なくて小鳥でも平和に遊べる場所）と同じようなものか？

「それよりもお前は黒スライムなのか？　それとも雷琅のメスなのかどっちだ」

「黒スライム？　ああ、俺は雷琅ではない。この雷琅の体はもらったがな」

「そうか。だけど俺も雷琅には用があるんだ、出ていってくれ」

出れんのか？　出れなかったら食材になってもらおう。幻琅種の肉

なんて中々口にする機会ないしな。

「はいそうですかと出ていくとでも思っているのか？」

「出なかったら殺して焼いて食べる」

「……何だ、その脅しは？」

「脅しじゃない。俺の趣味だ」

何か馬鹿を見る目で見てるな。実に不本意だ。

「凍、あんなの食べたらお腹壊しちゃうよ！　そんなに食べたいなら私のこと食べていいから、ね？」

焔にお姉さんぶった口調で注意されてしまった。いくら俺でも知り合いを殺して食べる趣味はないんだが？

「その顔は通じてないね。しょうがない、あの黒いのには雷琅から出ていってもらわなきゃね」

「そう簡単に、」

「黙っててよ」

焔が法剣を一閃し雷琅の口を閉じさせた。

容赦無いな。

「私は今、凍と話して、るんだよ？　部外者は、口を挟まないで、ほしいな？」

言葉を区切る度に法剣の切っ先が雷琅を襲う。

あれ、おかしいな。焔って炎琅なのに周りの気温が下がった気がするぞ。

「たかが寄生虫の分際で態度がデカイよ、虫は虫らしくクシャっと潰されてなよ」
「ぎゃあああああっ！」
焔が炎琅としての能力で法剣に炎を纏わせ雷琅に振るった。その軌道は今までのように単純な鞭のものではなく、１振りで何度もヒットするような複雑な動きで雷琅に迫り、全方位から蹂躙した。
え、そんなことできんの？　もしかして俺も銃に氷纏わせたりできる？　氷の散弾とか超やりたいんだけど。
そんな妄想に浸っていたら雷琅の口から黒スライムがフヨフヨと出てきた。また動き出す前に焔が焼き切った。両断された黒スライムは煙みたいに霧散し、消えた。
電気を纏った雷琅のパンチは平気で焔の法剣（炎付き）は駄目なのか。もしかして炎が弱点なのか？
「凍、終わったよ」
「そうだな。お疲れさま」
「うんっ！」
さっきまでの冷たい笑顔ではなく普通の明るい笑顔。
良かった、俺氷琅だけどあの寒さは耐えられなかったんだ。
「さて、コイツには色々と聞かないとな」
「え？　何を聞くの？」
「いや、雷琅なんだから炎琅の村の情報何か持ってるかもしれないだろ？」
忘れがちだが、元々俺が村を出る羽目になったのは雷琅と炎琅の抗争が本格化するかもしれないからだ。それに雷琅から炎琅の村まで

の行き方が聞ければそこから氷琅の村に戻ることもできる。焔に案内してもらえばいいだけだからな。

「そうだった。お父さんのこととかすっかり忘れてたよ」

白状だな、おい！　最近の子供はみんなこうなのかね？　全く世界はどうなってしまうのか。俺もその代だっつの！

お約束の1人漫才も終わったところで雷琅を起こすか。そしてこっち覗いてた人間は……いつの間にか逃げたな。臭いで追えるかと思ったけど強烈な香水を一帯に撒いたのか鼻が利かん。

「おい、起きろ」

とりあえず雷琅を揺さぶる。

起きない。

「凍、私が起こすよ」

んじゃ頼むとするか。焔相手ならペチペチ叩くんだが他のメスにはやっちゃいけない気がする。なんとなくだが。

「ほら、起きて」

ガスッ！

「ゴフッ！」

ん？　何かバイオレンスな光景を見たような気がする。

「もう、起きない気かな？」

「お、起きたわっ！　起きたわよっ！」
「あ、おはよ」
「え、ええ、おはよう」
何だか顔が引きつってるな。狼見知りするタイプなのかもしれないな。何だこの造語？
「なあ、あんた雷琅だよな？」
「え？　ああ、そうよ。そう言うあんたは氷琅であの娘は炎琅ね」
「そうだ。で、聞きたいんだが雷琅は炎琅と敵対してるのか？」
親父さんと村長にはそう聞いたけど俺は自分の目で見たものじゃないと自身が持てないから確認する。
本当に敵対していて襲ってきたらさっきみたいに2対1に持ち込めばいい。正々堂々なんて自然界では通じません！
「ふ～ん、聞きたいの？」
「ああ、是非聞きたいね」
何かを企むようないやらしい笑みだ。美少女だけどお近付きになりたいタイプではないな。
「なら私のペットになりなさい」
「お断りだよっ！」
俺がツッコミ入れる暇が無かっただとっ！？
「私のご主人様は凍だけなんだからっ！」
何だろう、雷琅より焔にツッコミ入れるべきな気がしてきた。

「ならペットのペットはどうかしら？」

俺はペットになる気は無いぞ？

「なら良しっ！」

良いのかよっ！

「さあさあ、知りたいことがあるのなら私のペットになりなさい」

もしかしなくても、俺は凄く馬鹿なことに関わってるんじゃないのか？

8話　遭遇は闘争に（後書き）

今回の纏め（嘘）：ようやく洞窟を脱出した2人、魔法使い見習いは魔王に優し気な視線の理由を聞いた。
「魔王が人間を好きになってはいけないと決まっているのか？」
突然の告白に戸惑い反応できなくなってた魔法使い見習いの唇は魔王によって奪われた。丁度良いタイミングで2人を見つけた勇者たちの目の前で。勇者たちには3つの選択肢が見えた。
魔王を殺す
魔法使い見習いを殺す
乱交する
勇者たちの倫理観の明日はどっちだ？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6772z/

フェンリルさん頑張る

2011年12月30日02時47分発行